

よい文章を書くための15か条

平成15年5月17日発行「補習校だより」第5号より抜粋

「よい文章」というのは、簡潔・明快・達意の三条件を満たしたものです。平たく言うと、すっきり、はっきりしていて、一回読んだだけですぐに意味が通じるということです。

この十五か条には、基本的なものから高度なものまで含まれていますから、小一の短作文から中学生の論説文にまであてはまります。また、高等部の人が大学入試の小論文に向けて練習するのにも役立つはずです。

小学生については、保護者の皆さんが添削（親や先生が文章を直すこと）をするとき、また、小学校高学年・中学生・高校生は、推敲（自分で文章を直すこと）をするときに参照してください。

《初 級》

- ① 「わたしは／ぼくは」をいちいち書かない。
- ② 必要のない「そして」を書かない。
- ③ 文（センテンス）を短くする。
- ④ なくてもよい言葉や部分（表現のダブリ・文脈から判断できること）は削る。
- ⑤ 文末の文体を揃える。

《中 級》

- ⑥ 接続詞を適切に使い、前後関係をはっきりさせる。
- ⑦ 主語と述語を照応させる。
- ⑧ 係る言葉は受ける言葉の近くに置く。
- ⑨ 体言止めや、……（点線）や——（中線）を使いすぎない。
- ⑩ 漢字を適正に使う。
 - ・漢語（漢字を音で読む言葉）は交ぜ書きしない（例「連らく」など）。
 - ・平仮名で書く言葉は漢字で書かない（例「・・・の様だ」など）。
- ⑪ 一つの段落では一つのことを述べる。

《上 級》

- ⑫ 読点は、意味と音調の両面から判断して打つ。
- ⑬ 文末の表現を多彩にする。
- ⑭ 書きながら読み返し、音調もよい文章にする。
- ⑮ 語彙・語法に、読み手の注意を引くものを交える。

よい文章を書くための15カ条 (解説編)

平成15年5月24日発行「補習校だより」第6号より抜粋

①「わたしは/ぼくは」をいちいち書かない。

「わたしは・ぼくは」で書き出すと、「わたしは、きょうはお母さんとケーキを作りました。」とか、「ぼくは、補習校は日本語の本を借りられるから、楽しいです。」というかたちになってしまいます。文法的にいうと、一つの文に叙述の主体が二つある複雑な構造ですから、すでに簡潔（すっきり）という条件に外れます。

読み手にしてみると、「わたしは」とあるので「わたしがどうしたのだろう」と思って先へ進むのですが、「きょうは」と続いているため、「わたしがどうしたのか」を気にかけつつ「きょう何があったのだろう」と先を急ぐこととなります。読み手をこういう宙ぶらりんな状況に置くことは、「^{たつ}達意」にも反します。

お母さんとケーキを作ったのは誰なのか、補習校で本を借りられて楽しいのは誰なのかは、書き手の名前が書いてあるのですから明らかです。つまり、④の「なくてもよい言葉や部分は削る」ということでもあります。

英語の「I」と同じに考えて「わたしは・ぼくは」をいちいち書くと、このような問題が生じます。日本国内でしたら中三でも理解できるかどうかと思われることであり、補習校の子ども達のほうが高度な国語学習をしていることとなります。

② 必要のない「そして」を書かない。

「六時に起きました。そして、顔を洗いました。そして、朝ごはんを食べました。」のように使われる「そして」は、単に時間の進行を示しているにすぎません。文章は、時間の進行に沿って叙述していくのですから、こういう「そして」は不要です。「六時に起き、顔を洗い、ごはんを食べました。」とすればよいのです。

「起き、・・・」「食べ、・・・」のように動詞の連用形+テン（連用形中止法）は、「そして」と同じ役割を果たします。ですから、「起きて、そして、・・・」のように「連用形+て+テン+そして」のかたちは、「起きて」と「そして」で意味が重なるうえに、「起きテ」「そしテ」と「て」の音おんが連続するので、もたついた感じがします。

これは、⑫⑭の例証でもあります。

子ども達が無気なく書く「そして」の大半は、要らない「そして」です。お子さんの下書きを一緒に読み返しながらそれらを消していくと、次に文章を書くとき、「そして」を書こうか書かないか考えるようになります。すなわち、文章に対する美意識の芽生えです。

次の文中の「そして」が必要なものであることは、これを取ってしまったら、意味も音調も不全な感じを受けることで納得できるでしょう。

「きびしい練習が続いた。そして、とうとう試合の日がやってきた。」

よい文章を書くための15か条 (解説編)

平成15年5月31日発行「補習校だより」第7号より抜粋

③ 文(センテンス)を短くする。

「よい文章」や「簡潔な文章」という意識を持っていない段階では、思い浮かんだことをただ書き連ねてしまいがちです。その結果、次のような「だらだら文」になってしまいます。「現地校の先生はやさしいけど、宿題をしていかないと書き取りをさせられるから、ぜったいやっていこうと思うけど、ぼくには英語が難しいので、宿題ができないから……。」

このような「だらだら文」を直すには、傍線部の接続助詞を接続詞に置き換えることです。

……やさしい。けれど、……

……させられる。だから、……

……と思う。けれど、……

それ以前の注意、つまり、「だらだら文」にしないためには、声に出して読み返し、一息で読める長さを目安にすることです。「一息」というのは「一呼吸」ということではなく、一読して分かるということです。低学年児童の書いたものでも、それは「達意」の文章ということになります。

ただし、以上はあくまでも《初級》段階の心得です。というのは、^{センテンス}文が短いことは簡潔な文章の要件の一つではありますが、それ一辺倒がよいわけではないからです。より詳しく、より豊かに述べるため、あるいは、昂揚した気分や複雑な状況を伝えるために言葉を重ねることもあるものです。長い文、短い文の織り成すリズムとともに読者を惹きつけてやまない高いレベルでの「達意」の文章は、「^{センテンス}文を短くする」だけでは叶いません。十五か条の中に「一つの段落では一つのことを述べる」ことを挙げながら、「一文では一つのことを述べる」と言っていないのは、そういうわけです。

よい文章を書くための15カ条 (解説編)

平成15年6月7日発行「補習校だより」第8号より抜粋

④ なくてもよい言葉や部分（表現のダブリ・文脈から判断できること）は削る。

「なくてもよい言葉や部分」には、次の二通りがあります。

A. 重複した表現(表現のダブリ)

B. なくても分かる言葉

Aを戒めるときよく用いられるのが次の例です。

「昔の武士の侍が、馬から落ちて落馬して、女の女性に助けられ……」

「そんなことしないよ」と笑っている子ども達に、「君達も『約十分ぐらい』などと言っているじゃないか」と言ってもきょとんとしていますので、「約十分」か「十分ぐらい」でよいことをいうと、初めて「そうか」という顔をします。

Bの例は、③の例文中の「宿題」がそれにあたります。二度目と三度目の「宿題」は「文脈から判断できること」ですから削ります。

重箱の隅をつつくようではありますが、「なくてもよい言葉や部分」の具体的な物差しとして挙げました。こういう目で仔細に点検すると、当てはまる箇所がけっこうあるもので、修正後のすっきり感は、低学年の児童にも明らかです。

⑤ 文末の文体を揃える。

「文末の文体」には、i. デス・マス体、ii. デアル体、iii. ダ体があります。iを敬体・丁寧体、ii iiiを常体・普通体とといいます。

次は、それらが混在している例です。

「現地校の校庭は芝生である。転んでも痛くありません。だから、保護者も安心だ。」

文末を揃えてみましょう。

デス・マス体「・・・芝生です・・・痛くありません・・・安心です。」

デアル体「・・・芝生である・・・痛くない・・・安心である。」

ダ体「・・・芝生だ・・・痛くない・・・安心だ。」

このような例が見られるのは、小学校高学年からです。それまでは文章語＝デス・マス体とと思っているので、こういう現象は起こりません。デアル体を知り、その大人っぽい、自信ありげな調子に惹かれかれたところから生じる現象であり、その点では、子どもが成長し、文末を多彩にしていこうとすることの表れとも見られます。

ともあれ、「デアル体」と「ダ体」ならそれほど目障りりではありませんが、これらと「デス・マス体」とが意味なく混在するのは、読み手に違和感を覚えさせるという点で「達意」に反します。

よい文章を書くための15カ条 (解説編)

平成15年6月14日発行「補習校だより」第9号より抜粋

⑥ 接続詞を適切に使い、前後関係をはっきりさせる。

必要のない「そして」を書いてはいけないことを②で述べました。今回は、それ以外の接続詞についてです。

A「チョコレートはおいしい。しかし、歯に悪い。」

B「歯に悪い。しかし、チョコレートはおいしい。」

逆接は、前件よりも後件に重点がかかりますから、論理的にはそれぞれ次のように続くはず
です。

A→「だから、食べた後に歯を磨く必要がある。」

B→「だから、たくさん食べてしまうのも仕方がない。」

A・Bとも、チョコレートのおいしさと歯への悪影響について述べていますが、両者の認識
と判断は大きく異なることとなります。

第5号で、「書くことは考えること」、さらには「書かなければ考えたことにならない」とい
う言葉を紹介しましたが、接続詞を適切に用いることは、前件と後件との関係について考える
ことにほかなりません。「考える」の語源は、接頭語「か」＋「向かう」ですから、「考える」
とは対象に向き合うことであり、作文の意義も実はそこにあります。

では、子ども達に対する指導はどうしたらよいのでしょうか。

小学校低学年や、日本語力の不十分な子どもの作文には、「そして・・・、そして・・・、そし
て・・・」型や、「・・・けど、・・・けど、・・・けど、・・・」型が見られます。この場合は、語彙自体
が乏しいのですから、まずは様々な言い方を教えます。

日本語力に問題のない子どもや中学生が論理的に適合しない接続詞を使っている場合は、
「もっとぴったりの言葉はないだろうか」と問いかけ、考えさせることです。

それらへの資料も兼ねて、論理展開における前後関係の区分と、それぞれに属す接続詞を挙
げます。本校の授業では、小4の下巻で①と②を、中1の一学期で①～⑦を指導しますが、国
語学力というより日本語力と論理性の問題ですから、日頃から正確に考え、的確に話すよう心
がけることがそのままトレーニングになります。

①順接	だから・それで・そこで・それゆえ・したがって・すると等
②逆説	しかし・けれども・だけど・だが・でも・ところが等
③並立	また・および
④添加	それから・それに・しかも・なお
⑤対比・選択	あるいは・それとも・または・もしくは等
⑥説明	つまり・要するに・すなわち・例えば・なぜなら・ただし等
⑦転換	さて・ところで・では

よい文章を書くための15か条 (解説編)

平成15年6月21日発行「補習校だより」第10号より抜粋

⑦ 主語と述語を照応させる。

主語—述語関係（主述関係）の基本文型は、次の四通りです。

- ア 何ガードウスル・ドウシマス
- イ 何ガードンナダ・ドンナデス
- ウ 何ガー何ダ・何デス
- エ 何ガーある・ない・いる・いない

このような結びつきになっていれば、主述は照応しているということになります。主述が照応していないと、何がどうしたのか、あるいは、どうしたのは何かが、読み手に伝わりません。

ただし、日本語では主語を必ずしも明示しませんので、主語にあたる言葉がつねに書かれていなければならないということではありません。

例で見てみましょう。

- A 「ぼくは、土曜日に補習校に行くのは、パパが運転します。」
- B 「九月からは、おかげさまで〇〇大学に進学が決まり、新しい学校生活が始まります。」
- C 「悲しいときは星を見つめて涙を流し、苦しみにぶつかったときは、星に励まされて新しい道を見いだすことができるたった一人の友だ。」

基本に戻ることが問題解決に役立つといっても、こういう場合の指導をア～エの基本文型から始めるのは生産的ではありません。それよりは、一つの文を短くするほうが効果的です。「文を短くする」ことを「初級」とし、十五か条中の③に置いているのは、基本的な留意事項ということです。

実際にやってみましょう。

- a 「(ぼくは、) 土曜日に補習校に行くのが、すきです。車はいつもパパが運転します。」
- b 「わたしは、おかげさまで〇〇大学に進学が決まりました。九月からは、いよいよ新しい学校生活が始まります。」
- c 「わたしは、悲しいときは星を見つめて涙を流す。苦しみにぶつかったときは、星に励まされて新しい道を見いだす。星は、わたしにとって、たった一人の友だ。」

なお、「照応」と似た言葉で「呼応」がありますが、こちらは「副詞の呼応」「呼応の副詞」というときに使います（「まさか→ないだろう」「もしかしたら→かもしれない」など）。

よい文章を書くための15カ条 (解説編)

平成15年6月28日発行「補習校だより」第11号より抜粋

⑧ 係る言葉は受ける言葉の近くに置く。

日本語では、何が—どうする（主語—述語）、どんな—何（修飾語—被修飾語）のように、前の語が後の語へ係っていきます。そうでないものを指して「倒置法」とことさら呼ぶのはその例証です。

実際の表現では、「どこの—だれの—いつの—何が、いつ—どこで—どんなふうに—どうした」というように、二重、三重に言葉が係ってきます。正確に、詳細に表現しようとするれば当然のことですが、そうすると「達意」を保つのが難しくなります。文章は、書いているときの自分以外に向けたものですから、後日の自分を含む読み手が一読して理解できるよう配慮しなければなりません。つまり、本項は、正確に、詳細に表現し、なおかつ達意の文章を書く技能ということになります。

では、本項が実際にどのように役立つのか、例で示します。▲が補習授業校の中3生による原文で、○は私が添削したものです。

- a ▲その途中でおべんとうを湖のそばのおかの上で食べました。
○その途中の湖のそばのおかの上で、おべんとうを食べました。
- b ▲今本当にこの本と出会えてよかったと思う。
○今この本と出会えて、本当によかったと思う。
- c ▲きっと、これが僕にとっての最後の自分らしさを取り戻すチャンスでしょう。
○これがきっと、僕が自分らしさを取り戻す最後のチャンスでしょう。
- d ▲必ず、一冊ホームズを読んだ夜は、こわい夢を見るのです。
○ホームズを一冊読んだ夜は、必ずこわい夢を見るのです。
- e ▲先生と二人で週に一度の個人レッスンのとき、試験に向けてがんばった。
○週に一度の個人レッスンのとき、先生と二人で、試験に向けてがんばった。

a～eで正したのは、次の関係です。

- a おべんとうを一食べました
b 本当に—よかった
c これが—チャンスでしょう
d 必ず—見るのです
e 二人で—がんばった

要するに、離れた位置にある「係る言葉」を、できるだけ「受ける言葉」の近くにもってきたということです。「できるだけ」というのは、意味が正しく伝わりさえするなら必ずしも「受ける言葉」の直前でなくてもかまわないということです。どこに置くかの判断は、声に出して読んで決めます。⑭で述べる音調によるということです。

よい文章を書くための15カ条 (解説編)

平成15年7月5日発行「補習校だより」第12号より抜粋

⑨ 体言止めや、……（点線）や——（中線）を使いすぎない。

体言止めや……や——は、言葉にならぬほどの感動や余韻や言い差しを表現しようとして使われます。次のa・bはたしかに平板であり、c～eにはそれなりの効果が認められましょう。

- a 大空は、どこまでも澄みきっています。
- b どこまでも澄みきった大空です。
- c どこまでも澄みきった大空。
- d どこまでも澄みきった大空……。
- e どこまでも澄みきった大空——。

しかし、書き手の重い感情や深い思い入れに何度も付き合わされるのは、読み手にとって楽なことではありません。それに、何度も使ったら、ただの書き癖と受け止められ、意図した効果を発揮しません。明快に語りきらない書き手に対していら立ちを覚える読み手もいることでしょう。

「書くことは考えること」「書かなければ考えたことにならない」という言葉の意味は、体言止めや……や——に託そうとしている光景や感情や意識を明らかにする過程にこそ書くことの意義があるということです。これらを安易に使うことは、理解や判断を読み手に委ねることにほかなりません。表現技巧を駆使しているのではなく、表現力が不十分なのです。何気なく使った……や——の部分を言葉に換えていく推敲段階は、深く考え、的確に表現することの訓練として、極めて密度の高いものなのです。

よい文章を書くための15カ条 (解説編)

平成15年7月12日発行「補習校だより」第13号より抜粋

⑩ 漢字を適正に使う。

- ・漢語（漢字を音で読む言葉）は交ぜ書きしない。「連らく」など。
- ・平仮名で書く言葉は漢字で書かない。「……の様だ」など。

「音読み」というのは「原音読み」の略であり、「訓読み」というのはその語の意味をとるということです。「机」を例にとると、英語の音は「デスク」、中国語の音は「キ」、訓（＝意味）はどちらも「つくえ」です。

「キ」という音だけ示されたら、「危・気・記・器・期・旗・機・既・季・亀・鬼・騎」のどれなのかわかりません。「キンキジャクヤク」「ガデンインスイ」など、耳で聞いただけではおまじないも同然です。それがわかるのは、「欣喜雀躍」「我田引水」という漢字を充てながら聞くからです。

つまり、漢語を仮名書きするのは、発音記号で書くようなものであって、漢字で書かなければ漢語はその言葉にならないのです。

ところが、日本の学校では、「習っていない漢字は使わない」と、漢語を交ぜ書きすることが普通に行われています。背景にあるのは、「子どもには漢字は難しく、それを課するのは可哀想」という思いこみです。

その実態を「牛乳」という漢語の場合で見してみましょう。海外の子ども達が使っている光村版教科書では、2年上巻54ページで「牛 うし/ギユウ」、6年上巻23ページで「ちち」、下巻29ページで「ニュウ」を習います。ですから、子ども達は2年生から6年生の10月まで「牛にゅう」という妙な表記を強いられることとなります。

漢語を教えなければ子ども達の語彙は増えません。語彙が乏しかったら、複雑な思考はできず、発信能力も受信能力も豊かにはなりません。外国語を習っても受け皿を持たないこととなります。このほうがよほど可哀想です。

「牛乳」と漢字で書いて振り仮名つきで示せば、子ども達も表記全体を目で覚え、しだいに書けるようになるのです。そういう例が、実は同じ教科書に載っています。小三上巻には「給食」「実験」などです。ところがその一方で、31ページに「しょう発」、34ページには「方こう」、38ページには「ろう下」とあるので、基準が分かりません。

ともあれ、作文を清書する段階では、忘れた字は辞書で調べ、漢語は漢字で書くことです。もちろん子どもは大人に尋ねてよいのです。

なお、「物語」「春風」「子供」のように漢字を訓で読むものは漢語ではありませんから、「物がたり」「春かぜ」「子ども」と書いても構いません。

平仮名で書くべき言葉で漢字を使ってしまうのは、形式体言です。「(必ず行く…) こと・もの・とき・ところ・わけ」という場合は、「事・物・時・所・訳」と書きません。接続詞の「また」を「又」と書く例もよく見かけます。但し書きの「なお」も「尚」と書きません。

よい文章を書くための15カ条 (解説編)

平成15年7月19日発行「補習校だより」第14号より抜粋

- ⑫ 読点は、意味と音調の両面から判断して打つ。
 ⑭ 書きながら読み返し、音調もよい文章にする。

読点（以下テン）をどこに打つかの「基準」は一応ありますが、文章を書いているならば、詳しく、正確に、効果的に表現しようという意識が働くものであり、さらに書き手の個性や口調も反映しますから、なかなか「基準」通りにはいきません。

例えば、「叙述の主題となる語のあと」もテンを打つところですが、一概にいけないことは次のような例を想定してみれば明らかです。a～dとも「叙述主題となる語」は、「梅の花は」です。

- a 梅の花は、早春になると、咲き始めます。
- b 梅の花は二月いっぱい咲き続けます。
- c 梅の花はきびしい寒さの中で、咲くのです。
- d 城の町全体を優雅な香りで包む梅の花は2月いっぱい咲き続けます。

aは、何ガードウスルという文の組み立てが、なるほどテンが打たれていることによって明快に示されています。しかし、テンが打たれてないbが一読して内容が理解でき、音調の流れも何ら問題ないのですから、「叙述の主題となる語のあと」という「基準」は説得力をもちません。また、cのように「咲くのです」を強調するという主要な目標のために、そこまでをテンなしで続けるという場合もあります。dはこのままだでも理解に支障はありませんが、テンなしでは苦しく、文字通りどこかでひと息つきたいところで、打つとすれば「梅の花は、」とするのが適当でしょう。

つまり、「叙述の主題となる語のあと」というのは「基準」というよりも「目安」というのが妥当ということになります。「原因・結果を示す『ので・から』のあと」もテンを打つべきところですが、「基準」通りにはいきません。

- e なかなかバスが来なかったので、僕たちは歩くことにした。
- f 僕たちは、なかなかバスが来なかったので歩くことにした。

e・fとも、「……ので」と「僕たちは」を含んでいます。eは前者を優先し、fは後者を優先したものです。

こういうことをどのように判断するかといえば、書きながら〈声に出して読み返す〉ことがいちばんです。音調をよくしていく過程は、ここまで述べた〈④なくてもよい言葉や部分は削る〉ことや、〈⑧係る言葉は受ける言葉の近くに置く〉ことを伴いますから、内容も整理されていくものです。

これも難しいとしたら、単純に《テンなしの部分は三十字を限度とする》とします。これは、私が小学校教科書の全部の文について調査した結果発見した法則で、小学生・中学生には無論使えますし、高校生・大学生の文章でも、特に長い語数の単語を含む文章でなければ使えます。

よい文章を書くための15カ条 (解説編)

平成15年7月19日発行「補習校だより」第14号より抜粋

⑪ 一つの段落では一つのことを述べる。

書いたことを他人に電話で話す場面を想定し、聞き手が「なるほど」と相づちを打ったり、「いつ?」「どうして?」などと質問をしたり、「それで?」と先を促したりするところで行を変えると、一段落一事項になります。

このルールは、文章の種類も学年も問いません。小学生が生活作文を「〇月〇日のことです」と書き出した場合、中学生が論説文を「イギリスの学校制度について述べます。」と書き出した場合、いずれもこの一行だけで改行することになります。井伏鱒二の「山椒魚」の冒頭は、「山椒魚は悲しんだ。」、向田邦子の「字のないはがき」の冒頭は、「死んだ父は筆まめな人であった。」という一行で改行しています。

⑬ 文末の表現を多彩にする。

文末の文体を統一すべきことは、⑤で述べました。「デス・マス体」「デアル体」「ダ体」を混在させないということです。だからといって、すべての文末が「……です。……です。」の連続では、文章が単調で、味気ないものになってしまいます。「ます」「だった」「のだ」「のである」「ではないだろうか」「と思われる」「のです」などでも同じことです。

「遺跡に着いた。a 真夏の太陽が照りつける。b 時間が止まっているのではないか。誰もが圧倒され、c ただ見入っている。」

書かれている内容は過去のことから、「照りつけていた。」「時間が止まっているようだった。」「ただ見入っていた。」となるところですが、このようにすれば現在形(a・c)が臨場感を、反語(b)が感動を表すとともに、文末が単調になることも避けられます。

15カ条を初級・中級・上級に分けていますが、⑤を初級とし、この⑬を上級としていることが納得していただきましょう。

⑮ 語彙・語法に、読み手の注意を引くものを交える。

15カ条の最後となる本項は、簡潔(すっきり)・明快(はっきり)・達意(伝わる)に加えて、楽しく、豊かにということです。要するに文章のお洒落ということです。

これは書き手のセンスや美意識に関わることから、簡単に身につけるわけにはいきません。しかし、常にそういう意識をもって接するなら、新聞記事・広告・テレビドラマの台詞等、トレーニング材料はどこにもあります。

子どもの場合は、家庭で日常接する言葉が重要です。マザータングの役割は実に大きなものがあるのです。

日常の会話を超えた語彙・語法を身につけるには、それに応えてくれる本を読むこと、そして、よい日本語の遣い手となるよう努めることです。子ども達の国語学習では、音読・作文・視写・漢字に励むことがそれにつながります。